

琉球大学学術リポジトリ

ジーン着用からみた大学生の衣服観〔1〕 一新
潟と沖縄の学生の比較を通してー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2009-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 綾子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/13710

ジーパン着用からみた大学生の衣服観〔I〕

—新潟と沖縄の学生の比較を通して—

藤原綾子

A Study on Students' View of Wearing Jeans.〔I〕

—Comparing Students of Niigata and Okinawa.—

Ayako FUJIWARA*
(Received August 20, 1983)

I はじめに

今日、ジーパンは年齢や性別に関係なく広く私達の日常生活に定着している。特に若者への浸透が進み、大学生においては最も利用度の高い衣服の一つである⁽¹⁾。

このジーパンが支持される理由は活動的で汚れても気にならず、かつ丈夫である、などがあげられる。一方においてこの長所が短所になることもある。時折見られる新聞の投書によると、汗くさく、汚れたジーパンから不快感を受けるというもので、大学生の倫理観が問われている。教官の中にも汚れてヨレヨレのジーパン姿には不快感を感じ話題にしている者もある。六年前、大阪の大学で起きた事件⁽²⁾はジーパンの着用がどういう時・場所まで許されるかという衣服の道徳・儀礼面にかかわった事件であった。

今の学生は世間の常識に疎いという声もよく聞く。

ジーパンに関しては、素材の消費性能の良否を扱った研究⁽³⁾⁽⁴⁾や、着用動作時の人体にかかる衣服圧を問題にした研究等⁽⁵⁾⁽⁶⁾、材料学、生理学面からの研究が盛んに行われており、ジーパンに対する衣服観、着装観のような人間の意識や行動に関する研究はなされていないようである。

本研究は、大学生におけるジーパン着用の意識や実態に環境、性別がどのように影響しているのかを明らかにし、今後の大学生の被服教育に役立てることを目的とする。

II 研究の対象と方法

1 対象

環境としては気候の異なる二つの環境(地域)を設定し、寒冷地から新潟の学生、温暖地から沖縄の学生を選んだ。具体的には、新潟大学教育学部学生(93名)と琉球大学教育学部学生(190名)である。

いずれの大学でも1～4年次の学生で、男女の割合が半々になるように対象を選定した。

2 研究の方法

上記の者に調査用紙を配布し、本音で書くよう指示を与え、記入させた後、回収した。

調査時期は昭和57年6月で、期間は6月7日～19日の二週間に実施した。

調査項目は実態調査として、

着用開始時期、所持数、耐用年数、着用頻度、着用する季節、洗濯の目安・手入れ等である。

意識調査として、

着用(愛用)理由、着用目的(時T・場所P・場合O)との関係、種々のT.P.Oにおける着用許容度、着用時(本人)の気まずい経験、着用者(他人)から受けた不快な経験等である。

* Home Eco. Dept., Coll. of Education,
University of the Ryukyus.

調査結果については、実態、意識調査とも比率で表わし、意識調査についてはカイ二乗検定を用いて差の検定を行った。

保温力測定試験⁽⁷⁾

ジーパンが冬の衣服として適しているか否かを他のスラックス素材と比較する目的で実施した。

実験はJISに定める「冷却法」(熱源体を低温水中に放冷させ、一定時間後の温度降下から保温力を求める方法)で行った。

熱源体の温度は55℃で室温17℃中での温度降下を測定した。

実験に使用した試験布は14オンスジーパン地(綿デニム)、コール天、厚さの異なる紳士服地(毛)二種の合計四種である。

III 結果および考察

有効回答数

アンケート調査の有効回答数は男女別、学年別に、表1に示した。

表1 有効回答数

	新潟大学 学生	琉球大学 学生	
男子	1年-9	1年-7	98 146
	2 -18 計	2 -33	
	3 -14 48	3 -46	
	4 -7	4 -12	
女子	1 -8	1 -6	92 137
	2 -19 45	2 -38	
	3 -12	3 -32	
	4 -6	4 -16	
計	93	190	283

男女比率は半々であるが、学年は2年、3年次学生が多数を占めていることがわかる。

ジーパンの着用開始時期

ジーパンを着用し始めた時期を図1に示した。新潟大、琉大とも大差はなく、小学生の頃、中学生の頃がほぼ同比率で高く、次いで高校生、

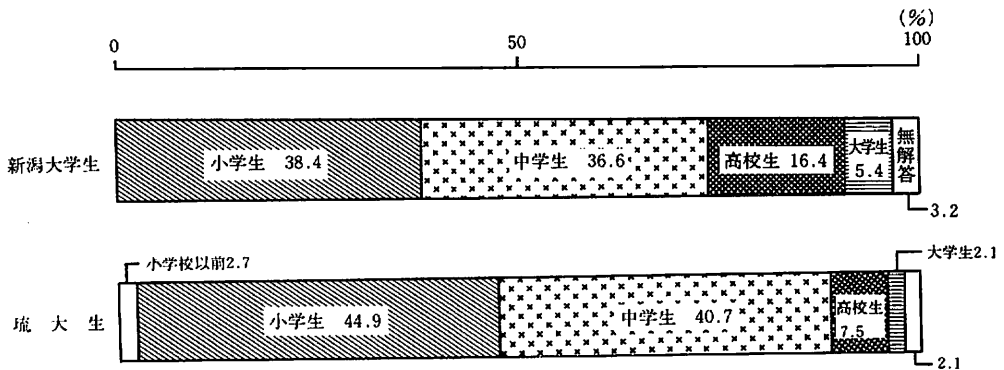


図1 ジーパンの着用開始時期

大学生の順となった。これらのことから、現在の学生は小学生・中学生の頃から着用していることがわかる。

ジーパンの所持数・耐用年数

所持数では地域差よりも個人差が大きいこと、さらに男女間では男子の所持数が平均して多い

ことが明らかになった。

全体として、一人平均3.5本、多い人で10本所持しており、ふだんはあまり着用しない人でも1本は所持している。

耐用年数は3～5年で、男女間では女子の年数が1～2年長い。全体として平均4年くらい着用している。

藤原：ジーパン着用からみた大学生の衣服観〔I〕

着用頻度

ジーパンの着用頻度を男女別に示したのが図2である。

図中「たまに」は月1～2回や特別な時（ピクニック等）のことである。「その他」はほとん

ど着用しない人である。

新潟大、琉大を比較すると男女ともに琉大生の着用割合が若干高い、中でも琉大男子の「毎日」「週3～4回」を合わせると76%にもなっていることが明らかである。

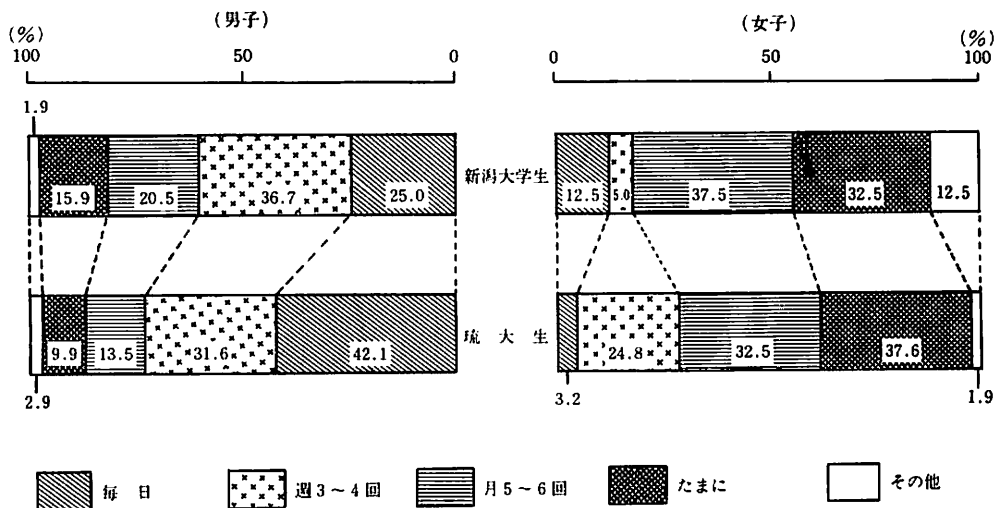


図2 ジーパンの着用頻度

ジーパンを着用する季節

一般に衣服というのは気候と関係があり、衣服は夏服、冬服、合着という分類もされている。ジーパンの場合、季節の衣服としてはどの季節になるのか。又季節を問わないオールシー

ズンタイプの衣服なのか、若者はどう扱っているかを明らかにするため、この質問を行った。

ジーパンを着用する季節についての結果は図3に示した。

新潟大の学生は男女共に、冬を中心にして、

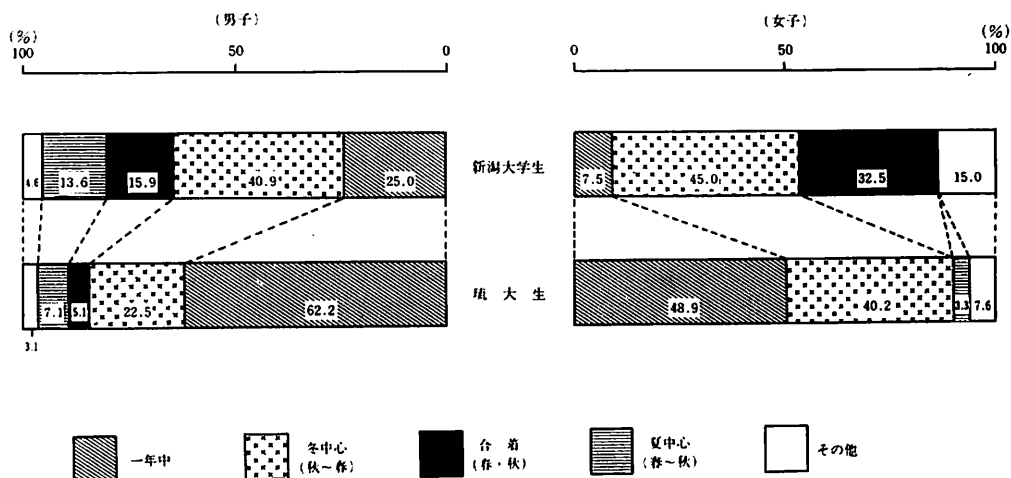


図3 ジーパンを着用する季節

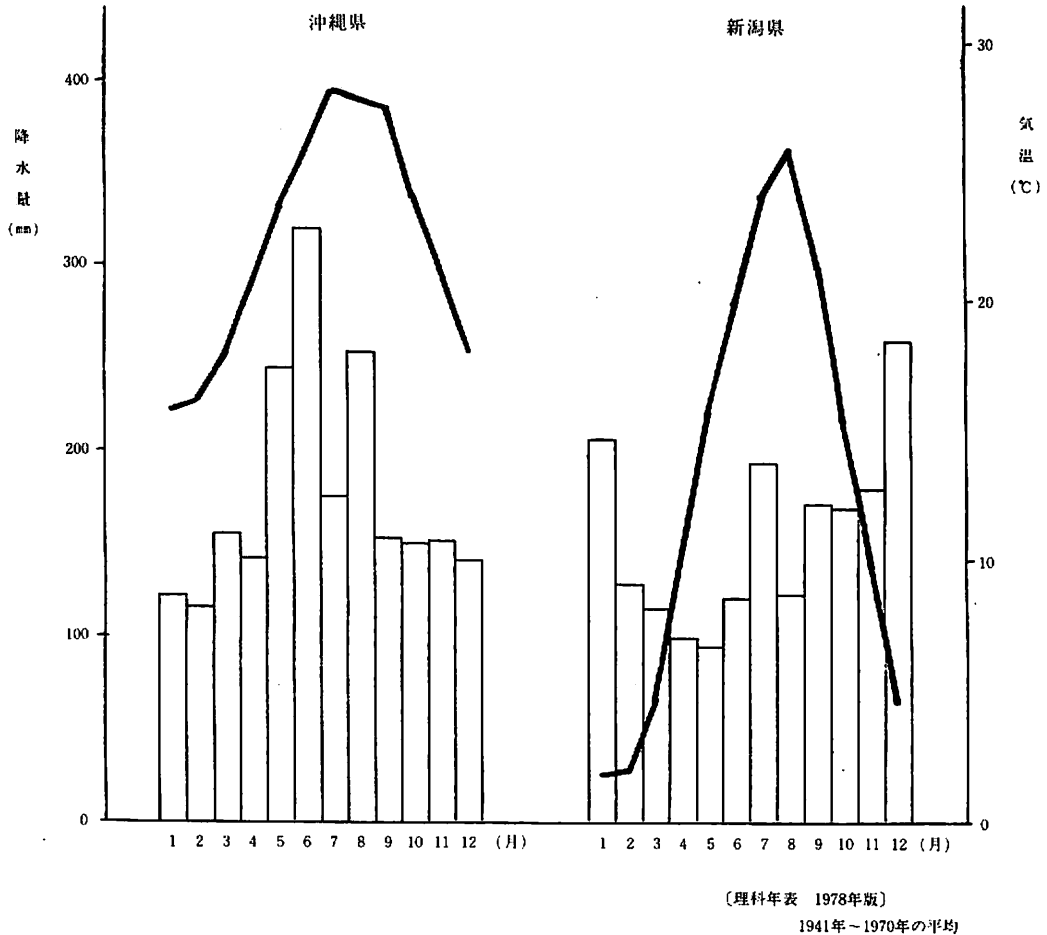


図4 沖縄と新潟県の気温と降水量

春、秋の合着としての着用が高い比率を占めた。

これに対し琉大の学生は男女共に年中、そして冬中心の着用が高い比率を占めていた。

ここで沖縄と新潟の気候のちがいを観てみよう。

図4は両県の年間気温と降水量を示したものである。沖縄は亜熱帯気候で、夏気温が高く雨も多い。夏の期間が長く5月～10月までの約半年は平均気温が24度を下らない。冬でも15度を下らず、最低でも10度を下ることは少なく従って年間の気温差は非常に小さい。

これに対して、新潟県は日本海沿岸気候で、冬気温が低く雨や雪が多い。夏は気温も高く乾燥している。8月の最高27度から1月の零度近くになり、最低は氷点下になることも多く年間

の気温差は非常に大きい。

夏でも南風の強く吹く時は「フェーン現象」と呼ばれ、猛暑にみまわれることもあり、これらのことから暑さに対する感覚は沖縄の人以上であると考えられる。

世界各地の民族衣裳、日本国内でも各地に伝わる伝統的な衣服をみても、個々の衣服が気候風土の影響を強く受けていることは言うまでもない。

新潟の学生は、以上にあげた理由のため夏のジーパン着用は避けられていると考えられる。

又沖縄の学生は、年間の気温差が小さい、春秋という合着の季節感覚がないことがジーパンの年中着用につながっていると考えられる。

ジーパンの保温力

では、ジーパンが冬の衣服として適するか否かを明らかにする目的で、ジーパンの保温力について実験をした。比較のため他の三種のスラックス素材も同時に実験した。

実験に使った布地の諸元は表2に示すとおりである。ジーパン生地としての綿デニムには、重さによって7オンス、11オンス、12オンス、

表2 保温力測定に使った生地の諸元

生地	組織	厚さ
ウール地（厚手）	斜文織	0.51mm
ウール地（中厚）	斜文織	0.34mm
コール天	横パイル織	0.72mm
ジーンズ地（デニム）	斜文織	0.88mm

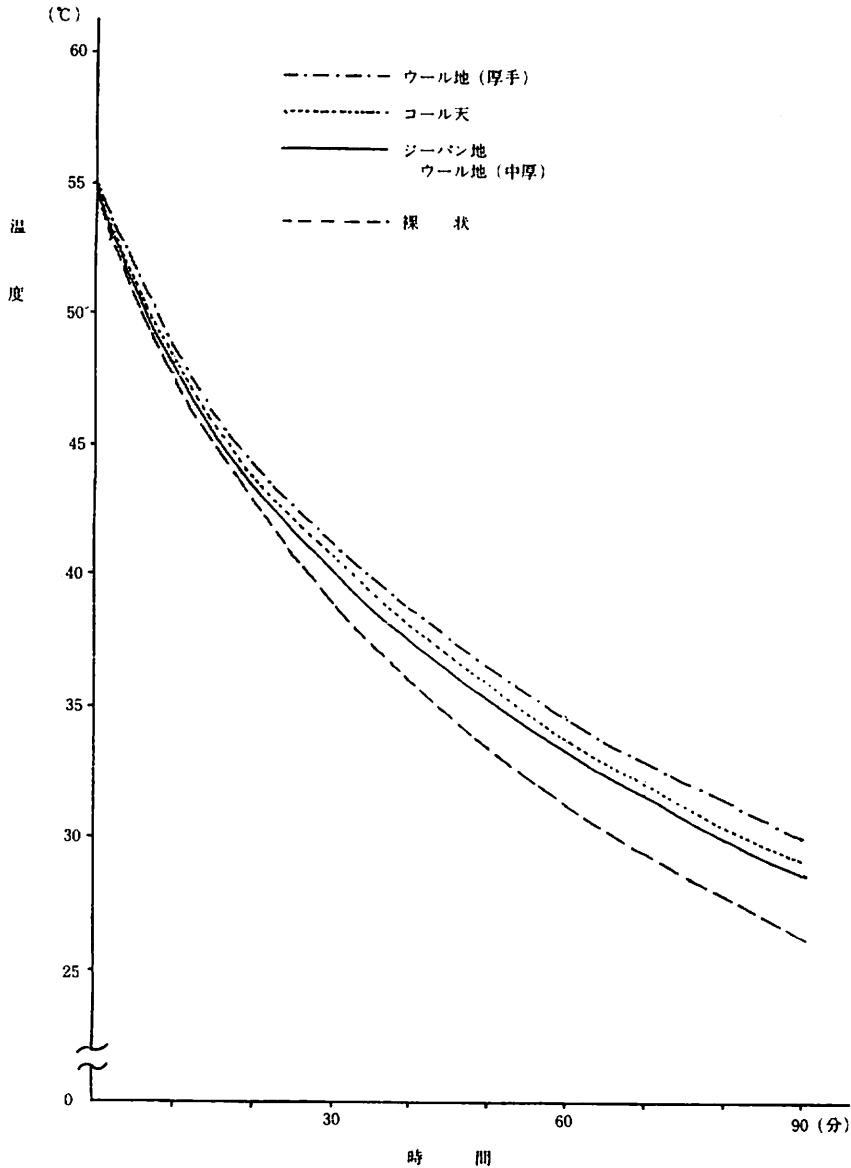


図5 スラックス素材の保温力

14オンスものがある。重いもの程厚さは厚い。オーソドックスなブルージーンズでは14オンス生地が圧倒的に多いよう⁽⁸⁾なので、この実験でも14オンス地を使用した。

保温力試験の結果は図5に示した。

この実験から、厚手ウール紳士服地の保温力が最も高く、ついでコール天、ジーパン地14オンス綿デニム)と中厚ウール紳士服地の順であった。いずれにしても気温17℃の条件下では厚手ウール地、コール天、ジーパン地の差はわずかである。

以上のことから、ジーパンは冬の平均気温が15度程度の沖縄では、冬の衣服としては充分役に立つと言える。

新潟の学生は、冬の間、ジーパンに長靴、又はブーツをはいている様だし、又昨今は建物内の暖房設備も整っているところから、上半身の防寒をしておれば冬の衣服として悪くないと思われる。

洗濯の目安、洗濯・仕上げ

洗濯の目安については図6に示した。

図から明らかなように男女差が大きい。

女子は、新潟大、琉大とも7～8割が「汚れるたびに」「2～3回着用後」と答えており、これに対し 男子の方は両大学とも「だいぶ汚れてから」「4～5回着用後」と答えた人の割合が高かった。これからみると男子学生はあまり洗濯をしていないようである。

新潟大と琉大生では男女共に琉大生の方が洗濯の回数は多いようであるが、これも気候と関係していると考えられる。前にも述べたとおり沖縄は一年のうち夏が長い。約半年は夏であるといってもいい過ぎではない。そのため汗をかきやすく、衣服が汗を吸い取るとその量がふえるにつれて汗臭いにおいがする。ジーパンは数ある衣服の中でも割合体に密着した衣服なので、汗を吸収しやすく、汚れも着きやすい。このため、まめに洗濯する必要が生じてくるのである。

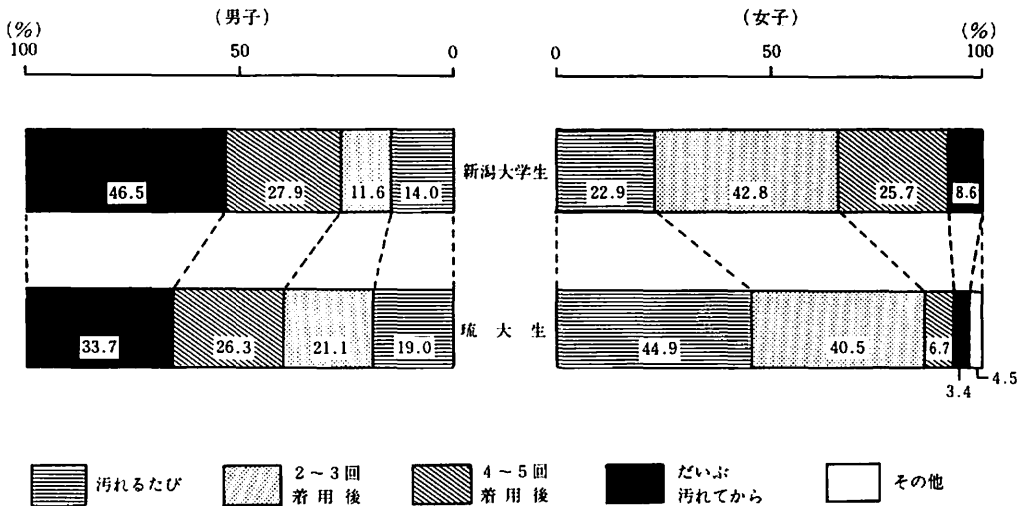


図6 洗濯の目安

新潟の場合、前に述べたように冬中心、そして春、秋の合着としての着用である。これからみて冬および春、秋という汗をかくことの少ない中では、そうたびたびの洗濯は必要ないと考えられる。

洗濯及び仕上げ方法についての結果を図7に示した。

男子は新潟大、琉大ともに洗濯のみが90～95%を占めている。女子は琉大女子に17.6%で洗濯後アイロンかけをしている学生がいることが

藤原：ジーパン着用からみた大学生の衣服観〔I〕

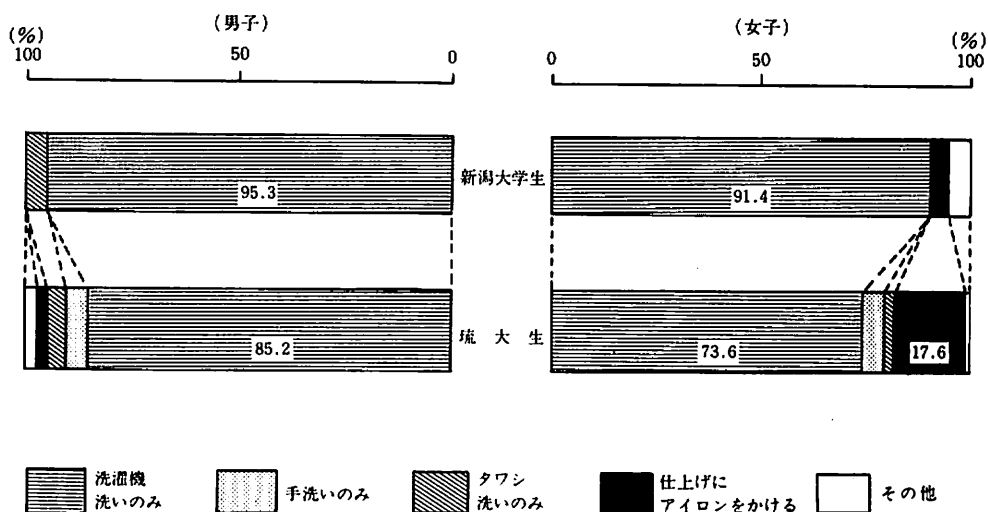


図7 洗濯及び仕上げ方法

わかる。

これは女性として身だしなみを整える者がいることで好ましい。

一般にジーパンはアイロンかけは必要はないが、しかし古くなって型くずれがおこった場合、アイロンかけをしてきちんとプレスされたものは古くとも見る者にとって気持ちがいいものである。

この項目のまとめとして

男子は両大学共もう少しまめに洗濯をしてほしいものである。特に琉大生は年中平均して着用していることから、汗、垢ほこりで汚れたジーパンは衛生上好ましくないことを認識すべきである。

次に意識調査について分析し考察をする。

ジーパン着用の理由

ジーパンを着用（愛用）する理由については男女別に図8に示した。

新潟大、琉大生とも男子は「汚れても気にならない」「活動しやすい」「手入れが簡単」の順であった。もう少し詳細にみると、新潟の学生の理由では「手入れが簡単」の割合は「活動し

やすい」と同じ割合で、これは寒い地方では毛織物や毛ニットなどどうしても家庭では面倒で、ドライクリーニング利用が多くそのため費用もかさむ。ジーパンはともかく電気洗濯機で洗えるしかもアイロンかけもいらないので、手入れの面で容易であるという実感があるためだと思われる。

琉大男子は「手入れが簡単」よりも「丈夫で季節に関係なくきられる」がわずかに高い比率となったのは、年中平均着用からきいていると考えられる。

女子では「活動しやすい」をあげた人の割合は男子の二倍であった。この理由は他の服、特にワンピースやスカートに比べ、活動的になれる実感があるためだと考えられる。

女子では新潟大、琉大ともに同じ傾向を示し、「活動しやすい」、「汚れても気にならない」、「手入れが簡単」の順であった。

「自分に似合う、好きだから」を理由としてあげた学生は一人もいなかった。

又所持してはいるがほとんど着用しない人の着用しない理由は「自分に似合わない、好きでない」をあげていた。

全体として 両大学生とも、活動しやすい、汚れても気にならない、手入れが簡単、丈夫で

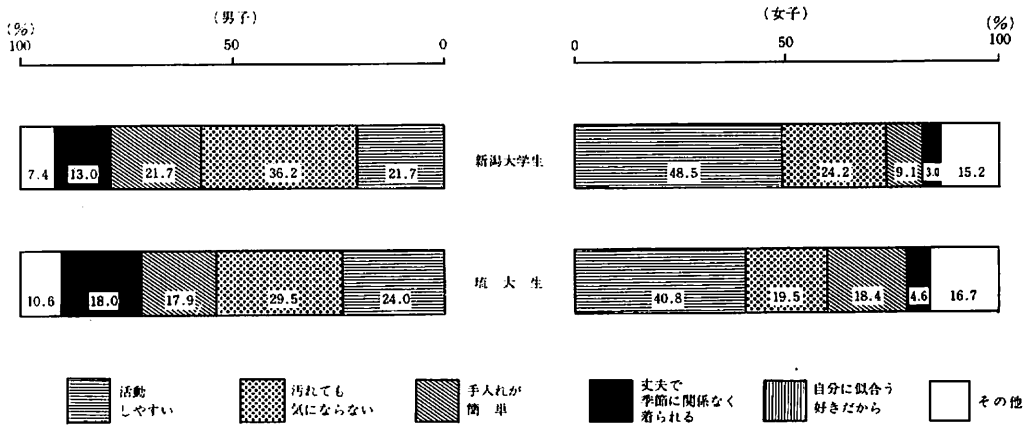


図8 ジーパン着用の理由

季節に関係なく着られる、と答えているところから、大学生はジーパンを実用的な衣服として高く評価していることが明らかになった。

ジーパンの着用と目的（時・場所・場合）

衣服に関して、T（時）・P（場所）・O（場合）という言葉が使われるようになったのは昭和40年のことである⁽⁹⁾。豊かな国になった日本はよそゆきとふだん着、晴着から寝間着までの間にきめのこまかい目的に応じた服装を考えるようになった。

以後、現在まで、このT.P.Oという言葉は服装と礼儀の面では欠かせない言葉になった。

こうした服装とT.P.Oの関係は文明社会では一つの社会習慣と化し、このルールをはずれるときさまざまな摩擦が生じる。例としては1977年に大阪大学で起きた事件は、ジーパンを着用した女子学生の受講を外国人教師が拒否した事件で、しばらく論争が続いたことは新聞で知ることができる。

ジーパンを着用できる時や場所は国によっても異っているようである。

アメリカと日本では異っているようだが⁽¹⁰⁾、いずれにしてもアメリカのメーカーが言うように果してジーパンはT.P.Oを問わない⁽¹¹⁾衣服であろうか。

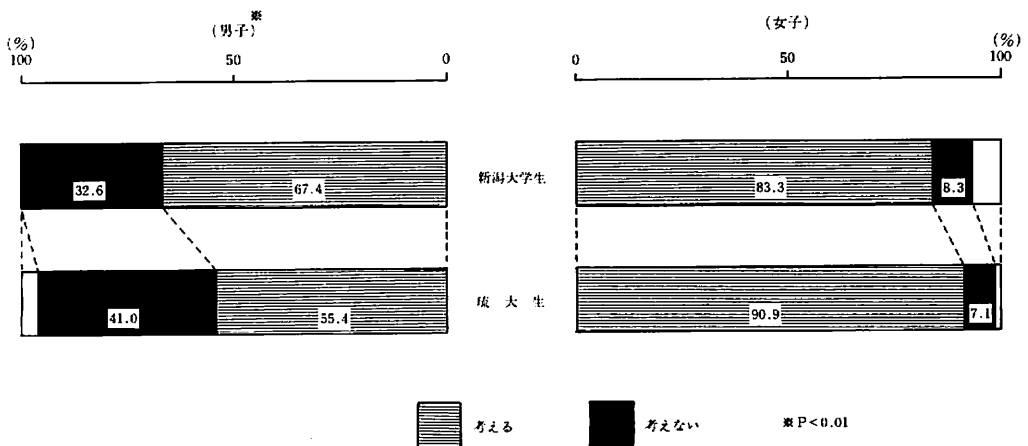


図9 時・場所・場合を考えてジーパンを着用する割合

ジーパン着用の際、T.P.Oを考えているかの問に対する答を図9に示した。

「考えている」と答えたのは、男女で比較すると女子に多く80～90%であった。新潟大、琉大で大きな差はない。

男子は新潟大で67%、琉大で55%であった。

「考えない」と答えたのは、男子が女子に比べて多く、新潟大32%、琉大41%であった。検定の結果、女子では有意な差はえられなかったが、男子では、危険率1%で有意な差がえられた。

次に大学生が経験している時・場所・場合を具体的にあげ、その時や場所に「実際に着用したことがある」又は「着用したことはないが着用してもよいと思う」と答えた人を許容者として学生の意識をしらべたのが表3である。

具体的な時や場所・場合を二つに分類し、大学生の日常的な行動範囲をA、その他非日常的な行動範囲をBとした。

新潟大、琉大ともに、男女とも日常的な時や場所の項目では高い許容を示し、非日常的、公的な項目では許容度が低い。

差がみられたのは、A類の「遠方の友人宅」

表3 項目別におけるジーパン着用の許容の割合

		(単位%)	
項 目		新潟大 学生	琉大生
A	大 学 構 内	98.8	98.5
	家庭教師 (アルバイト)	71.4	86.9
	買物を目的とした繁華街	97.6	98.5
	遠方の友人宅 ※	58.3	80.2
	ピクニック	96.4	98.8
	スポーツ時	60.7	56.7
	自宅でくつろぐ時	95.2	91.1
	労務 (アルバイト)	84.5	85.5
	作 業 時	90.5	89.0
B	学 校 見 学	25.0	27.4
	入 学 式	21.4	21.0
	卒 業 式	19.1	14.6
	結 婚 式	6.0	5.8

※ P<0.001

だけで、差の検定を行った結果、危険率0.1%で有意な差がみとめられた。

これは遠方という言葉に対する両大学生のとらえ方のちがいが、遠方に行く時の交通手段のちがいが原因となっているように思われる。新潟の学生のとらえる遠方とはと考えても明らかな答はでてこないが、たぶん汽車や電車、などを使用するであろう。そうするとどうしても駅をとおらざるをえない。どうしてもジーパンでいくわけにはいかないと考える者が50%いても不思議ではない。

それに対し琉大生は、現在、県内・県外出身者の割合は半々ぐらいだと思われるが、遠方を県内の田舎、例えば北部や離島ととらえた場合、自家用車、バス、離島の場合は船利用が多く、あまり服装には気をつかわなくてすむ、むしろ船、バスの場合、ジーパンの方が便利であるという理由が考えられる。

ジーパン着用時の(本人の)気まずい経験
ジーパンを着用時の気まずい思いをした経験は図10に示した。

経験有と答えた人の割合は両大学共大差はなかった。男女間では男子に比べて女子の方が両大学とも有りとなされた人の割合は若干高かった。

気まずく感じた時・場所・場合では、男子が「入学式」「結婚式」「ダンスパーティ」「教育実習」あげているのに対し、女子は「クラス会」「アルバイト(家庭教師)先」「空港」「ダンスパーティ」「教室」をあげていた。

男子の場合は大学をはなれたしかも非日常的な時や場所での経験であるのに対し、女子は日常的なふつうの時や場所及びその付近で経験していて、男女で大きく異っていることが明らかである。

男子はもともと服装に無頓着な者が多いこともあるが、目的に応じた装いというものがよくわかっていないせいだろうと思われる。

女子の場合、同性がほとんどスカートやワンピースの時、自分だけ、もしくは自分を含めて少人数の者がジーパン姿だと気になるようで、どうも流行の心理でいうところの「同調性への欲求」⁽¹²⁾ がはたらくようである。

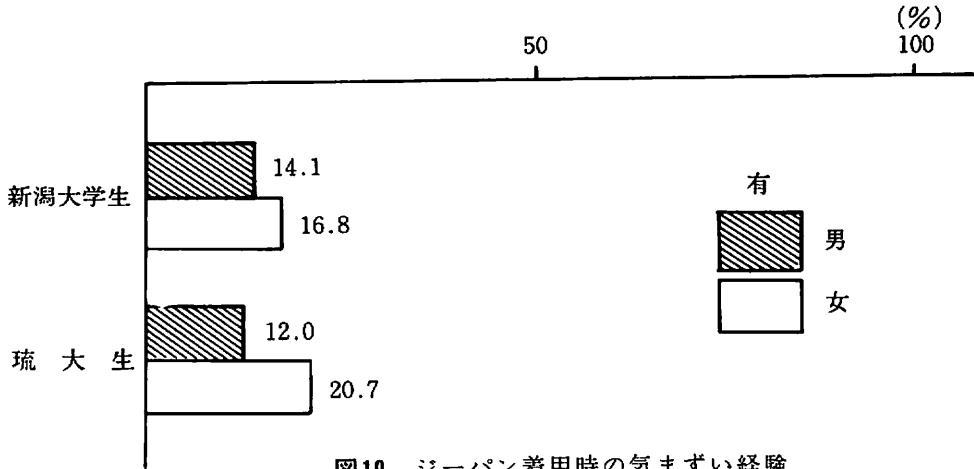


図10 ジーパン着用時の気まずい経験

ジーパン着用者から受けた不快な経験

ジーパン着用者から受けた不快な経験については図10に示した。

経験有りと答えた人の割合は新潟大に比べ琉大の方が高い。

両大学とも男子に比べて女子の割合が高かった。特に琉大女子の35%は全体の中で最も高かった。

その時や場所、内容を具体的に記入させたのをまとめると、男子は、学寮や学内での経験をあげ「汗くさい」「悪臭がする」等であった。女子は場所は学内で「汗くさい」「よごれている」

「よごれてヨレヨレになった服」であった。男女とも衛生的な面を理由としてあげているのが特徴である。これについては、洗濯の目安の所で、男子学生は「だいぶ汚れてから」にしていること、又着用理由で「汚れても気にならない」と考えていることと関連ずけてみると、琉大女子の不快な経験の相手は身近にいる男子のようである。

清潔な衣服は衣服がその役割を果すための基本的な必要条件である。洗濯の意義については小学校家庭、5年の「衛生的な下着」、6年の「上着の洗濯」の中で学んでいるはずである。

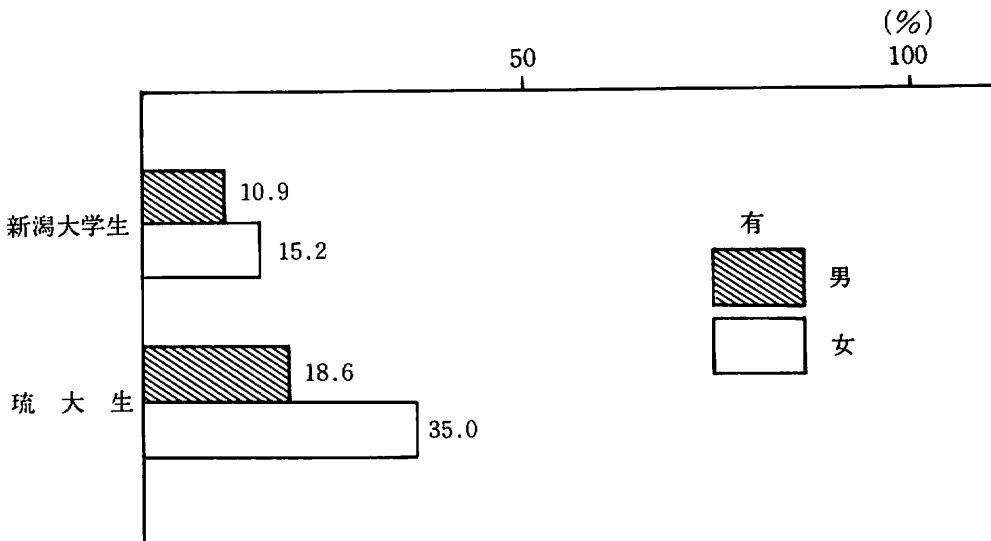


図11 ジーパン着用者から受けた不快な経験

ところが最近の大学生をみるとこの基本的なことが欠けているように思われる。

現在の男子学生の中には、衣服の役割に対する認識不足、大学生としての甘えがあるため、衣服の清潔に気を配らず、まわりの人に不快感を与えている者がいる。

これからの被服教育のあり方として、被服の衛生や生活目的に合わせた着装などに重点をおく必要があることを痛感している。

IV 要約

ジーパン着用環境や性別がどのようにに影響を与えているのかを明らかにするため、新潟の学生、沖縄の学生を対象に意識と実態について調査を行った結果、以下のようなことが明らかになった。

- 1) ジーパンの所有率は両大学生とも高く、全体の99%の人が所有していた。女子にくらべ男子の方が所有率が高く、10本以上の所有者もいた。新潟と沖縄では地域差は明らかでなく個人差が大きい。耐用年数は3～5年で、若干女子の方が長く着用している。
- 2) ジーパンの着用開始時期については新潟大、琉大ともに小学生と中学生の頃と答えた人が多い。
- 3) 着用頻度では地域差の影響はなく、男女間で異なり、男子が頻繁に着用している。
- 4) 主に着用する季節は、新潟の学生が合着、冬着であるのに対し、沖縄の学生は一年を通しての年中平均着であった。
- 5) ジーパン生地としての14オンス綿デニムの保温力を他のスラックス生地と共に試験した結果、中程度の厚さをもつ紳士服地（ウーステッド）と同等の保温力を有し、コール天と大差はなく、冬の上着として役立つことがわかった。
- 6) 洗濯の目安では、男女差が大きく、男子はかなり汚れてから洗濯する割合が高かった。
- 7) 着用理由としては、男女ともに汚れても

気にならない、活動しやすい、洗濯が簡単をあげていた。特に女子は活動しやすいを強く意識している。両大学生ともジーパンを実用的な衣服として高く評価していることが明らかになった。

- 8) ジーパンの着用が許される時、場所、場合として、日常的な行動範囲は八割以上の学生が許されるとみている。さらに非日常的な場である入学式や卒業式へもかまわないとみている学生が二割程度いた。
- 9) ジーパン着用時の本人の気まずい経験では、男子が入学式、結婚式というような非日常的な行動範囲である時・場所をあげたのに対し、女子は日常的な時や場所をあげていた。
- 10) ジーパン着用者から受けた不快な経験では、琉大の方が新潟大より高い比率がみられ、いずれでも女子の方が男子よりも高かったが、中でも琉大女子は全体の35%が経験者であった。その内容は汗くさい、汚れている等衛生的なことをあげていた。

最後に、本調査に御協力下さいました、新潟大学の阿部好策先生をはじめ学生諸氏、および本学教育学部の学生諸氏、家政学科卒業生の島袋陸枝さんに深く感謝申し上げます。

V 文献

- 1) 大野静枝他 各種温熱環境下着衣標準の設定に関する全国調査報告書 (1982)
- 2) ジーパン論争 朝日新聞 5月25日付 (1977)
- 3) 長井弥寿子 デニムのズボンとコール天のズボンの消費性能の比較 東北女子大卒論 (1982)
- 4) 杉浦晶子 着用済みジーンズの基礎的解析 日本女子大卒論 (1982)
- 5) 奥野右子他 スリムなジーンズの身体に及ぼす影響 衣生活 5巻2号 (1982)
- 6) 中橋美智子・渡辺恵美子 ジーパン着用時における機能性に関する衛生学的研究 第33回日本家政学会総会発表要旨集118 (1981)

- 7) 大野・軍司・平田・藤原・松本・宮田・山田 被服材料実験法 82-84 建帛社 (1979) イ新聞社出版局 (1972)
- 8) 講談社編 ジーンズ大研究 117 講談社 (1981) 10) 浜野安宏 ふだん着の時代 219 ビジネス社 (1981)
- 9) 戸板康二 元禄小袖からミニスカートまで—日本のファッション300年絵巻 228 サンケイ (1982) 11) 前掲 8) (1981)
- 12) 川本勝 流行の社会心理 138 勁草書房 (1982)